

2020年6月20日

山口西田読書会 2020年6月13日のプロトコル

佐野之人記

## 1. テキスト

「表現作用」「三」。第4～5段落。143頁12行目～145頁12行目まで。

## 2. 議論

今回も講読箇所で考えたことを書いていただく形式でのプロトコルです。今回の担当は唐露さんです。

唐露：こんばんは。前回の西田読書会について「考えたこと」を書きました「機械的自然」及びその法則である「機械的因果」には「合目的的統一」がある。これが「時の背後に移り行かないもの」である。またこれ（目的）が「判断意識」を超えた「高次的な直観の立場」においてのみ認識することができる。「時」は「概念的認識の対象界が高次的なる直観の世界に結合する」とき成立するとは、「時」は直観的知識である目的を判断意識によって概念的に捉えようとすることで成立するだろうか。ここの「結合」の意味が分からない。

佐野：それでいいと思いますが、確かに概念がどうして直観に結合するのか、それは大変難しいでしょう。そもそも「直観」と言っている時にすでに概念化されてしまっていますね。

唐露：「一つの対象界からこれを包容する高次的立場に結合する」ことには、「全然我を没し尽くして、主客合一なるところに有をみる」という意義が含まれていると思った。

佐野：なるほど。それは面白い。

唐露：そうして、「高次的なる直観の立場は時の系列の起原となり又その終極となる」とは、直覚的統一（働くものの本体）が自らを無にして、自分を表現する過程として理解したが、ここんところがよく分からない。

佐野：解釈としてとても面白いが、このテキストでそこまで言っているのか、というと怪しい。そうした他者が自らを無にして、というところ、つまりは逆対応的視点が出てこないのがこの時期の西田の特色と言えるのかも。

唐露：お忙しい中を、ご意見をいただき、どうもありがとうございました。おっしゃた通りに直観と言っている時にすでに反省が働いている。

佐野：ええ。

唐露：今読んでいるところで、西田はカントの純粹統覚、時などの概念を再考察することで、思惟と直観の結合を考えようとしていると感じました。ある意味で西田はカントの純粹統覚などを学びながら批判し、自分の説を出して正当化することだと考えられるでしょうか。

佐野：まさにそんな感じですね。

唐露：ここで、西田はカントを頻繁に出した理由が何でしょうか。

佐野：それは西田哲学の根本性格に関わる問いでしょう。そこを考えることが西田理解を深めることになる、としか今のところ言えません。

唐露：また、自覚の立場は判断を超えた高次的な直観であり、しかもそれを概念化しないと分からない。だとすれば、「判断を超えた直観の立場がある」という彼の確信の理由が分からない。

佐野：そういうことになりますね。始とか終とか、超越とかにはそうした矛盾がついて回ります。我々はどうしてもそれを反省的に理解して分かった気になろうとします。しかし本当は「分からない」ことを扱っているという注意は大切だと思います。

唐露：ここんとこについて、テキストを読み進んで考えていきたいと思う。

佐野：私もそうしたいと思います。

唐露：「他者が自らを無にして、というところ、つまりは逆対応的視点ががでてこないのがこの時期の西田の特色」であるというご意見に賛成いたします。

佐野：まあ、そのところは大事なところなので、慎重に考えていきたいと思います。

唐露：「高次的なる直観の立場は時の系列の起原となり又その終極となる」の意味はまだ分からない。

佐野：前に *diskursiv* と *intuitiv* の例を挙げましたが、それでどうです。

唐露：最後に時は無内容的という理由が最初に与えられる内容と最後に与えられる内容が同じであると述べられているが、その与えられる内容はどこから与えられるか。高次的立場におけるものでしょうか。

佐野：そうですね。直観です。今回はこのくらいにしておきましょう。ありがとうございました。